

Report レポート

(一財)北海道開発協会「北海道における地域コミュニティに関する調査研究」レポート②

地域サロンが 参加者に与える 心理社会的効果



片山 めぐみ (かたやま めぐみ)

札幌市立大学デザイン学部 准教授

札幌市生まれ、社会福祉士。東京工業大学大学院総合理工学研究科博士後期課程修了、博士(工学)。2006年に札幌市立大学に着任し、2022年から現職。専門は建築計画学、社会福祉学、コミュニティデザイン。著書に『地域創生デザイン論：“まち育て”に大学力をどう活かすか』(共著、文真堂、2020年)など。

北海道では、過疎化や家族形態の多様化などを背景に、地域コミュニティによる共助の取り組みやセーフティネットの役割が増してきています。当協会では、地域課題の解決に向けた支援方策の提言に向けて「北海道における地域コミュニティに関する調査研究」に着手しました。

研究会では、構成メンバーであるそれぞれの委員がこれまで行ってきた調査研究の成果等をもとに議論を深めています。これらの内容を委員からの報告を中心に皆様にお届けします。

1 地域サロンの存在価値

新型コロナウイルスの猛攻が去って早2年。いまだに地域コミュニティにおける社会的居場所の問題が顕在化したままだ。人と人とが顔を合わせてコミュニケーションをとったり、家庭外にも落ち着ける居場所をもてるということがこれほど希求されたことはなかった。日本的な地域コミュニティの崩壊、地縁と血縁の重要性、高齢者の孤立、子どもの孤育など枚挙にいとまがない。本稿では、不特定多数の地域住民が定期的集まって共に過ごす場所を「地域サロン」と称し、参加者の心理や行動に及ぼす影響を検証した三つの研究を紹介しながら地域サロンの存在価値を改めて問い直してみたい。一つ目は、地域サロンに通うことによって高齢者の健康が維持され、介護認定が減るのかを調べたHikichiら(2015)による研究。二つ目は、筆者が提案したコミュニティ・レストランにおいて来店者の来店目的が変化していく過程を追った研究。三つ目は、筆者のゼミの学生が立ち上げたコミュニティ・マルシェの来場者が感じる居場所感についての研究である。

2 地域サロンを利用すると介護認定が減るのか？

愛知県武豊町では地域サロンにおける高齢者を対象とした趣味や地域の支え合い活動を推進していたが、サロンがない地域でサロン新設の要望が持ち上がった。しかし、町の財源不足を背景にサロンに税金をかけるだけの価値があるのかということが問題になり、サロンに通う人々と通わない人々で介護認定数に差が出るのかを調べる5年間の縦断調査が行われた(文献1)。

当該地域でのサロン利用率は、250m圏内にあれば20%の高齢者が利用するが、2km圏内だと1%に下がることが分かっていた。筆者の試算によれば、介護認定によって給付される費用を1人当たり年間200万円、サロン新設費(改修)を1件当たり800~1,000万円と想定すると、サロンを利用することで介護認定が4~5人減れば新設費用が賄える計算になる。

5年後、サロンに通うグループの介護認定者は通わないグループの半数であった。サロン新設の妥当性が確認できたため、町は総合計画に設置計画を位置付けサロンの計画的に増やしていく施策へと舵を切った。

3 なぜコミュニティ・レストランに通うのか？

筆者は12年前に、北海道寿都町でコミュニティ・レストラン「風のごはんや」を提案し、町や町民と連携して開業した*1。企画に3年間を費やし恐る恐る開店したところ、予想を上回る来店者数に拍子抜けし、仲間達と「なぜこんなに来てくれるのか？」と疑問に思った。そこで来店理由を聞くアンケート調査を毎年実施することにした(表、文献2)。アンケート結果は、いずれの年も「メニューが良い」「値段が安い」が高い割合を占め、地物の食材を使ったこだわりのメ

表 来店理由の経年変化

来店理由	1年目 (平成 24年)	2年目 (平成 25年)	4年目 (平成 27年)
1 メニューや栄養バランスなどの食事内容が良い	67%	77%	59%
2 値段が安い	70%	77%	76%
3 子どもや若者、高齢者などあらゆる世代が集まっていて楽しい	5%	13%	32%
4 誰かに会える	7%	29%	17%
5 家が近所	28%	29%	16%
6 スタッフがいきいきとしていて元気をもらえる	21%	23%	34%
7 ほどよい人間関係が築ける	7%	10%	23%
8 週1回来ることで生活のリズムができる	9%	19%	9%
9 友人と出かける場所としてちょうどよい	23%	13%	21%
10 情報収集ができる	2%	6%	5%
11 グループホームや2階の居住者を見舞うついでに食事をする	0%	0%	1%
12 楽しい雰囲気がある	—	24%	39%
13 子どもを遊ばせることができる	—	16%	14%
14 ゆっくりできる	—	16%	16%
15 こういう場所に来ることで安心感がある	—	6%	10%
16 この場を盛り上げる一員として顔を出したい	—	—	6%

ニューが人気であることは納得だった。興味深かったのが、年を経るごとに来店者同士や運営者とのコミュニケーションに関する理由が増えてきたことだ。調査開始から3年間で10%以上増加した項目は、「子どもや若者、高齢者などあらゆる世代が集まっていて楽しい」「誰かに会える」「ほどよい人間関係が築ける」などであった。

高頻度利用者においては変化が顕著で(図1)、「スタッフがいきいきとしていて元気をもらえる」が25%以上増加している。また、「週1回来ることで生活のリズムができる」は高齢者、「子どもを遊ばせることができる」は子育て中の若い主婦、「こういう場所に来ることで安心感がある」は全世代の回答にあった。また、高頻度利用者のコミュニティ・レストランに通うようになった前後での精神的な変化(図2)は、「とても感じる」と「まあまあ感じる」を合わせて50%以上となっている。

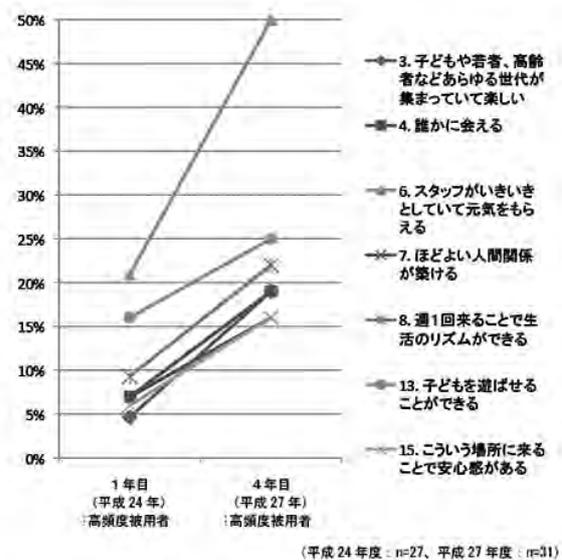


図1 高頻度利用者の主な来店目的の変化(1年目と4年目で10ポイント程度増加した項目を抽出)

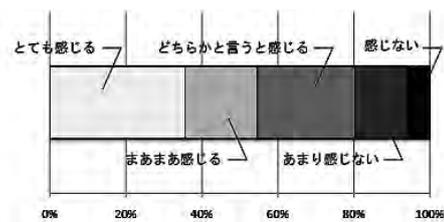


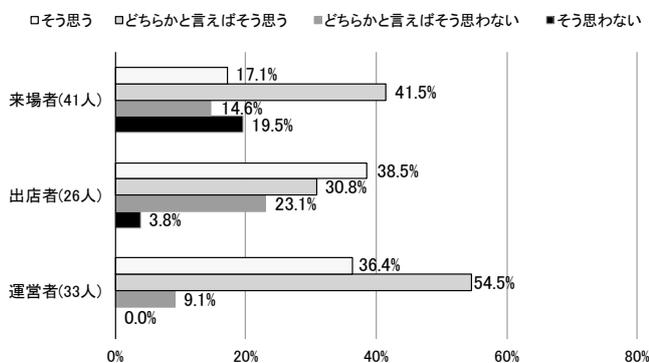
図2 精神的な変化(平成27年度:n=32)

* 1 毎週月曜日の開催で500円の定食1種類と飲み物を提供している(2024年2月現在)。

4 コミュニティ・マルシェは人々の社会的居場所になるのか？

筆者が教鞭をとる札幌市立大学デザイン学部で学生達がコミュニティ・マルシェ「八百カフェ」を立ち上げた*2。運営のコンセプトは、地域社会で何かチャレンジしてみたい人々が軽い気持ちで参加することができ、先述の寿都町コミュニティ・レストラン「風のごはんや」のように客や出店者として通い続けるとソーシャル・キャピタルが醸成されてさまざまな活動や組織が生まれることである。この場所には「出店者」、マルシェの企画運営を担う「運営者」、買い物やワークショップ参加、パフォーマンス観覧をするだけの「来場者」が存在する。

サークル代表の学生が自身の卒業研究として、「八百カフェはあなたにとって居場所であると感じますか？」というアンケート調査を行った（文献3）。結果は、この場所と比較的関わりが深い出店者と運営者がそう思うと回答しているだけでなく、買い物や遊びに来ているだけの来場者も約6割が自身の居場所と認識していた（図3）。



質問:「八百カフェはあなたの居場所であると感じますか？」

図3 コミュニティ・マルシェにおける居場所の認識

「八百カフェはあなたにとってどのような居場所ですか？」という問いに対して親子で参加していた来場者は、「家族で楽しめる居場所」「親子でのびのび参加できる居場所」と回答していた。出店者は、「新しい事業や活動のヒントを模索できる場」「客や他の出店者から情報交換や商品アイデアをもらっている」な

どチャレンジの場となっていることが分かった。運営者の学生は、「自分を表現できる居場所」「仲間ができたことで私がそこにいる意味を感じられるようになった」としている。自分のやりたいことにチャレンジして成長できることに加え、活動を通して仲間との絆が生まれることで居場所になったと考えられる。

5 地域サロンが参加者に及ぼす心理社会的効果

愛知県武豊町のサロン調査では、サロンで交流をしている人の方が健康であることが定量的に示され、他世代にとってもサロン建設を承認できる説得材料が得られた。他の事例についても心理社会的な側面での効果を考えてみたい。

コミュニティ・レストラン「風のごはんや」では、来店目的が他の来店者やスタッフに会うことに変化し、この場所ができたことでポジティブな精神的影響を得ていることが分かった。一方、客同士は互いを認識している程度で店の外で行き来をするような間柄に発展している人はいなかった。これは、親密な関係ではないがまったくの他人でもない関係性が紡ぎ出す「弱い紐帯」のソーシャル・キャピタルといわれている。初めは「美味しい」「安い」という理由で来ていたのが、次第にスタッフや客という立場の違いを超えてその場にいる人々が互いに場の意味合いを形成していったと考えられる。



「風のごはんや」の様子

* 2 5月～10月の隔週日曜日、午前9時～11時に開催している（2024年2月現在）。



「八百カフェ」の様子

コミュニティ・マルシェ「八百カフェ」では、夏季に月2回という低い開催頻度であるにも関わらず、出店者や運営者だけでなく来場者も「八百カフェ」を居場所と認識していた。湯浅（2023）によると、「居場所とは、そこに居ると落ち着ける、安心できる、ほっとする、元気になれる、力が湧いてくる、ごきげんでいられるとその人自身が感じられる「場」のことであり、関係性を含んだ空間の概念」である（文献4）。先述の卒業論文では、自らを含む運営側の学生達は、仲間と活動する中で安心して居ることができる「受容感」が得られ、企画や運営によって新たな学びがあり成長していると感じられる「自己効力感」が高まったのではないかと考察している。そして、目の前のお客さんの喜ぶ様子や笑顔を見ることで自分が役立っているという「自己有用感」が感じられることでこの場所が居場所になったと結論付けている（文献3）。

不特定多数の地域住民が集まる現場では、「困っている人」はどこにいるのですかと聞かれることがある。地域サロンは今まさに困っている人（当事者）を内抱しつつ、まだ困っていない人々が「弱い紐帯」によって予防的に人との繋がりを構築しておく場所である。松村ら（2012）によると、一見価値が低いと思われる「弱い紐帯」を多く持っている人ほど人と人をつなぐ潜在力を有する。「強い紐帯」を持つグループは関係が緊密であるが故に外部と遮断されがちで新規

の情報が入りにくいとされる。「弱い紐帯」が「強い紐帯」との橋渡しをし、新しいアイデアや重要な情報をもたらす道を開くと述べている（文献5）。筆者は、「弱い紐帯」が繋がるきっかけは「楽しさ」ではないかと考える。「楽しさ」を生み出し、個別支援を得意とする福祉専門家と協働するデザイナーに注目が集まりつつあると感じている。

【参考文献】

1. Hikichi H, Kondo N, Kondo K, Aida J, Takeda T, Kawachi I: Effect of a community intervention program promoting social interactions on functional disability prevention for older adults: propensity score matching and instrumental variable analyses, JAGES Taketoyo study. Journal of epidemiology and community health 69 (9): 905-910, 2015
2. 片山めぐみ, コミュニティ・レストランにおけるソーシャル・キャピタルの醸成, デザイン学研究65(3), pp. 1-6, 2019
3. 大村莉乃, コミュニティマルシェ「八百カフェ」における社会的居場所の創出に関するアクションリサーチ～参加者の役割の自己認識に着目して, 札幌市立大学デザイン学部卒業研究, 2024
4. 湯浅誠, 居場所の政策論<試論>～こども食堂を切り口に考える～, 地域福祉研究, 公No.11, 通算No.15, 2023
5. 松村暢彦, 尾田洋平: 行政職員のパーソナルネットワークとまちづくり基礎力の関連性, 土木学会論文集D3 (土木計画学), 68(5), I_197-I_206, 2012